
日没の都

ナシオカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日没の都

【Nコード】

N3905Z

【作者名】

ナシオカ

【あらすじ】

料理人の少女、スーシャは実は転生者。不思議な能力を授かっ
てはいたものの、育ての親の教えを守って一切使わず、前世からの夢
だった料理人としての人生を歩んでいた。

料理人として人生を謳歌するスーシャだったが、一度だけ魔が差す
ように使ってしまった力のせいで人生が狂いだしてゆく。
メロドラマ風目指します。

プロローグ

力を使つてはいけないよ。

毒蛇がお前を殺しにやってくるからね。

「つたく、今日で最後だつてのに、今日の今日までお仕事かあ」

愚痴を零しながら、神殿の長い階段を下ってゆく少女は、料理人のスーシャだ。毎日三度の食事時に、大勢の料理人達がこの階段を使い、皿を上げ下げする。神殿内に調理場があれば苦労は無いだろうが、神殿にナマモノは持ち込んではいけないそうだ。

これから汚れた皿を見習いに渡して、自分の朝食を済ませ、その後は……

スーシャの顔がにまりと綻んだ。

「その後は、カンテグラード！」

小さく喜びに叫び、階段を駆け下りる。皿がカチャカチャと鳴るが、割れたつて構わない。明日はもう自分は違う空の下にいるのだから。カンテグラード。芸術と学問の都。全ての美しいものと醜いものがあつまる場所。武器と毒薬の魔都。詐欺師と泥棒の国。

呼び方は様々な小さな中立国だが、スーシャにはどうでもいいことだった。そこが美食の都であるかぎり、地獄にあつたつて飛び込みたいと思うのが料理人というものだ。

ふと、階段途中で足を止めたスーシャは眼下に広がる美しい景色に目を止めた。

この神殿に料理人見習いとして入ったのは七歳の時だった。周囲の景色など見る間もないほどに仕事に追い立てられてきた。しかし、改めて見るとこのサリナル教の聖地、バスガルクは本当に美しい。

森を切り開くように作られた白亜の神殿が立ち並び、中央の道の石畳は薄緑色の高級石材が惜しむことなく敷き詰められ、その上を上位神官達が乗った金と紫で飾られた白い馬車が行き来する。贅を凝らした一帯は、サリナル教の潤沢な資金力を誇示しているようだ。森を抜けたあたりには、ここトルファナ帝国の首都が広がる。薔薇色の大理石を使った特徴的な建築群は、この白い神殿群といい対比になっている。

遠くまで来ちゃったもんだな……。

スーシャはじつと景色を見つめる。遠い遠い自分の故郷　日本を自然に思い出していた。

医師として必死に働いていたあの頃。

前世のスーシャは紛争地帯でのフィールドワークに明け暮れていた。素晴らしい仕事だと人は褒めるが、虚しかった。助けても助けきれない。両手で掬った砂が指の間からサラサラとこぼれ落ちてゆくようなあの日々。

自分の無力さに心が折れるのはすぐだった。

何か言いたげな同僚の視線から逃げるようにして日本に帰国して、人間ドックに再就職して……

それからの人生を、スーシャは思い出したくなかった。

自分は逃げたのだという後ろめたい気持ちはずっとついてまわり、いつしか世の中を皮肉って生きるような人生を送ってしまった。

何もかもが面白くなく、人生の色々な事がうまくいかなくなった。

スーシャのせいで嫌な思いをした人も沢山いただろう。親にも友人

にも恋人にも心配をかけた。
急な大病にも、ホツとしたくらいだ。
前世のスーシャはつまり、死にたかった。あの時、逃げた時から、スーシャの心はもう死んでいたのだ。本当に死ねると思つて楽になつたくらいだ。

やめよう。

頭を振つて、スーシャは息を吐き出した。昔を思うといつても息苦しくなる。

何故か前世の記憶を持ったまま、この異世界へと生まれ変わつてしまったが、スーシャは今度の生に満足していた。

神殿を抜けた森に捨てられていたスーシャを拾つてくれた育ての親である老婆はとても優しくかった。

老婆はもう亡くなつてしまつたが、自分は前世からやってみたかった料理人という職業にもちゃんと就いている。昔と違って、仕事には誠実に向い合つて頑張っている。

生まれつき妙な能力は備わっているが、老婆の言いつけ通りに全く使つてこなかつた。

「人生、上手くいつてるなー……」

ポツリと呟いて、スーシャは皿を抱え直した。

階段を降りきり調理場のある棟へと向かう途中には、屋根のない水場がある。そこは身分の低い下位神官達が洗濯をする場所だった。

上位神官達の衣服は、神官以外が触れると穢れるといつて、洗濯や刺繍、縫製までもが全て同じ神官の仕事として割り振られる。

勿論、このような仕事は最初から中位神官である貴族出身の神官や、

下位神官でも裕福な商家の息子などにはさせられない。結果、スーシャと似たような境遇である捨て子や貧しい家の出身の下位神官達が一手に引き受けているのだ。それが神殿の現実だ。

その水場で、今日は擦り切れた神官服を纏った子供が、手を赤切れで真つ赤にしながら洗濯をしていた。年の頃はスーシャより5つほど下だろうか。

気の毒だな……。

だが、仕方がない。スーシャだって幼い頃から似たような仕事をこなしてきたのだ。だが通りすぎようとしていたスーシャは、思わず小さく声を上げてしまった。

「あつ……血？」

子供の神官服の背中から、じんわりと赤いものが滲みだしてきたからだ。

中位や上位の神官達に打たれたのだろう。可哀想だが、これもよくあることだ。だから、いつものスーシャなら通り過ぎていただろう。それが出来なかったのは、その子供の擦り切れた服があまりに薄いせいで、子供の背骨をくつきりと写していたからだ。

その痩せた背中へ、スーシャに昔を思い出させた。あの日々に両手からこぼれ落ちた砂を。

「ねえ。パン食べる？ ほら、余りだけど」

気づくと、スーシャはパンを千切って子供の目の前に差し出していった。しかし子供はそのパンを見ようともしない。

「食べなよ。お腹空いてるでしょう」

「……いらぬい」

愛想のない子供だ。もしかしたら、それ故に疎まれているのかもしれない。

こちらを見る子供は、顎で切り揃えられた黒髪に緑色の瞳の、容姿だけならとても可愛らしい子だった。

スーシャは「ほら、食べなさい」と、まだ温かいパンを子供の口に押し込んだ。肌はガサガサで、唇の端も切れて血が滲んでいる。よほど栄養状態が悪いのだろう。

ついでに上位神官が手を付けなかった野菜のマリネも口に押し込んでやる。子供は面食らった顔で、だが口はしつかりモゴモゴと忙しくなく動かしている。徐々に明るくなる目の光に、スーシャは嬉しくなって微笑んだ。

「美味しいでしょ、この私が作ったんだから当然だけどね！」

実際、腕はいいはずだ。スーシャの若さで上位神官付きの料理人というのは、ものすごい出世なのだ。

女であるスーシャに度々セクハラや八つ当たり気味の嫌味をぶつける上位神官だったが、それでも実力だけでまだ十代の女を登用してくれた事には、スーシャはそれなりに感謝している。

そして、その功績と才能ゆえに、スーシャはカンテグラードへの留学が決まったのだ。

「本当ならお肉もあげたいけど、残ってないんだ」

子供の頭に手を伸ばして髪をかき混ぜて、スーシャは気づいた。手がぬるりと滑る。頭も打たれて、出血しているのだ。

スーシャに触れられて痛かっただろうに、子供は嬉しそうに目を細めている。そのことがスーシャの胸をついた。

今日の午後にはカンテグラードに旅立つ。もうここには足を踏み入れなければ、あるいは……？

大丈夫かもしれない。いや、きっと大丈夫だ。この子さえ黙っていれば、きっと大丈夫。だってこの子の髪は顎まである。耳たぶが隠れるんだから。

「……じつとして」

きよとんとした子供に真剣な顔で「今からすること、誰にも言っちゃだめだよ」と言い聞かせる。
指先から『力』が溢れ出す。

『力を使つてはいけないよ』

育ての親の声が蘇る。だけど、一度くらいなら。もう遠くへ行くんだし、きつと一度くらいなら。

指先が熱くなるにつれ、そこから白い光が溢れる。その光をかざすように子供の頭上に掲げた。

数秒して、光が収まって、スーシャは少年の髪をかきあげ、耳たぶを確認した。白い耳に嵌めこまれたように、血の色の宝石が輝いている。勾玉のように曲線を描き、不思議な紋章のようなものが内部に浮かんだ、あの宝石。

スーシャはごくりと唾を飲み下した。

怪我もすっかり治っている。少年はその事に気づいたようで、傷ひとつない手のひらを目を丸くして凝視している。

「い、いい？ この事は誰にも言わないで。耳たぶにおかしな石が

ついているのも、誰にも見られちゃダメだから……！ 言ったら……
…言ったら、そう。毒蛇がお前を殺しにやってくるよ」

「……」

「分かった!？」

子供は、こくりと頷いた。そして恐る恐る口を開く。

「あなたの……名前は？」

「ス、スイリヤ。スイリヤっていうの。でももうここ辞めるから。や、辞めて故郷に帰るの。明日探してもいないから」

スイリヤは一般的な女性の名前だ。スーシャはそう名乗って、子供に背を向けた。

子供はじつとスーシャを見つめていた。

スーシャの姿が見えなくなっても、そこにずっと立っていた。

スーシャは知らない。

自分がカンテグロードに発った後、聖痕を持った神官が現れて大騒ぎになったことを。

その神官が最上位神官として教会に君臨し、腐敗し墮落した教会を立て直すという名目で多くの神官やそれに連なる貴族を激しく弾圧し、帝国に粛清の嵐が吹き荒れたことを。

そして、その最上位神官が自分に聖痕をさずけた聖女を探していることを

最上位神官が画家に描かせた絵は各地へ配られ、聖女の捜索は続いていた。

その絵には最上位神官が出会った銀髪の女性が描かれている。髪を編んでまとめ、粗末な服を纏ったその女性は天使のように美しく、右手には何かの入った籠を抱えている。そして光る左手は跪く少年にかざしている。

『聖女の導き』と名付けられるこの絵は、今は十数枚も存在していたのだ。

その後、この絵はたった一枚しか残っておらず、サリナル教の最も大きな神殿の奥深くに大事に保存されている。当の最上位神官が聖女への不敬であるとして、手元への一枚を残し、他の十数枚を処分したという話である。

十二番目の王子・1

下位神官の朝は早い。

最近入ったばかりの新人なら尚更だ。

ゾランは夜明けとともに下位神官服に着替え、鳥の巣のように絡まった藁色の髪を整えながら井戸へと向かい、朝の掃除に使う水を神殿へと運ぶ。いつもはすれ違うのも、全員が質素な下位神官服を纏った者ばかりだ。

だが、今日は違う。

今日は毎月一度ある祝福の日で、ここ聖地バスガルクの大聖堂で典禮式が開かれるのだ。

この日ばかりは早朝の通りに人が溢れる。白絹の生地借金糸と紫糸でサリナル教の聖なる啓示が刺繍された正装を身にまとう上位神官達、白い神官服に紺の縁取りをつけた中位神官達も言葉を交わしながら大聖堂へと向かっている。

しかし、普段よりもどこか浮き足立った様子だ。

不思議に思うゾランに同じく下位神官の仲間が声をかけた。

「今日は最上位神官様が来られるそうぞぞ」

ゾランは弾かれたように仲間の方を向く。

「フェルナーダ様が!? ほ、本当か!?!」

「ああ、初めてだっけ? フェルナーダ様……最上位神官様」

ゾランは首を忙しく縦に振った。上気した顔のゾランに、仲間の少年が自慢気に言う。

「俺は半年前に拝見したぜ。遠目だったけど、そりゃもう物凄く神々しいお方だった」

「だろうな、そうだろうとも」

ゾランは神妙な顔で頷いた。神々しいに決まっている。かのお方は何しろ二百年ぶりに現れた聖痕保持者なのだ。

聖痕。それがどういうものなのかゾランは知らない。自慢気な仲間の神官も知らないだろう。それは人に軽々しく広めるほど”安い”ものではないのだ。

代々の最上位神官、トルファナ帝国の皇帝と宰相のみに伝えられる、神の印。聖痕を授かった人間は、その瞬間から人を超えた存在になる。奇跡の力を持つのだ。

実際、現最上位神官アルヴァ・フェルナーダも最初は自身が聖痕を授かったとは知らなかったという。だがある日、病を得た同室の神官 彼も現在は上位神官の一人だ を奇跡の力で癒した事が広まり、時の最上位神官に調べられて、初めて自分が聖痕を授かった神聖な存在であると気付いた。

それからのフェルナーダの活躍を思うと、ゾランの胸は熱いもので満たされる。

貧しい捨て子だったフェルナーダ様は、聖痕を授かり神々しい存在になられた。前の最上位神官は喜んで身を引き、フェルナーダ様が最上位神官へとなられ、汚職神官どもを破門して処刑なされた……。

その頃、ゾランは神官ではないただの子供だった。帝国の下町に住む、どこにでもいる子供だ。父親はとうに何処かへ出ていき、母親は縫い物と刺繍の内職をしていた。

その子供の目に、大通りを引っ立てられてゆく貴族や上位神官達の姿は強烈な印象を残した。

威張り腐っていた権力者どもの、あの顔！ 破門されたクスどもが、涙でぐしゃぐしゃになって必死で命乞いをしていた！ 無駄なのに！

ゾランを含めた民衆は処刑場に詰めかけ、汚職神官や貴族どもの血に熱狂した。ゾクゾクする高揚と興奮。難しい事は分からないが、きつとこれからは帝国もサリナル教も良くなってゆくのだ。

そしてそれを指揮する、まだ見ぬ歳若い新最上位神官に心酔した。みな夢中になって彼の噂をしていた。その噂話を誰もが聞きたがり、何度も何度も繰り返される。

破門状を出した新最上位神官はアルヴァ・フェルナーダ様とおっしゃるらしいぞ。

聖女様だか天使様だかにもらった聖痕持ちってほどだ、きつとすげえ神官だろう。

黒髪に緑の目だってねえ。いい男だってさ！

顔なんざどうでもいい、貴族の横暴がちょっとでも良くなるんならな。

神官もひでえもんだ、あいつらの売る薬は高すぎだ。説教だって適当なもんさ。

元は孤児って話だ。俺らの味方に決まったら

元孤児という立場から聖痕を得て成り上がり、貴族を殺し上位神官を殺した。

他に何をした訳でもないのに、それだけでアルヴァ・フェルナーダは民衆の英雄となった。それから彼は今、サリナル教の法を改正しているそうだ。

それで薬を安くしたり、農村にまで学校を作ってくれたりするらしい。

雲の上のお方だ。逆立ちしたって俺みたいな人間には出来やしない善行だ。いや、どんな奴にだってそんな事が出来るものか。やはり神に選ばれた方なのだ。

ゾランは興奮した気持ちを熱い溜息にして吐き出した。

直後、大聖堂に大きなざわめきが起こった。最上位神官が到着した、と皆が口々に伝え合っている。

見たい。ひと目だけでも、見たい。フェルナーダ様をひと目！

小柄な少年であるゾランは夢中で、屈んで人の股ぐらの間を通るような真似までしてざわめきの中心地へと近づいた。見たい、見たい、見たい。俺たちの英雄を見たい！

ざわめきは強く大きくなってゆく。すぐ近くにあの方がいるのだ。

あともう少し……！

その時だった。偶然当たった誰かの足に蹴られ、屈んでいたゾランは転がるようにして空間へと躍り出た。

「……っ、痛え……！」

打った鼻を押さえて蹲るゾランに、すいと白い手が差し出された。

「大丈夫ですか？」

優しい声にゾランが上向く。そして、そのまま口を開けて固まった。

白絹の服。だが上位神官などではない。上位神官には使えない、銀色と緑色の刺繍がされたその神官服。そして黒髪に緑の目、聖布で包まれた右の耳
教会の頂点に立つ唯一の最上位神官、その人だったのだ。

「さ、っ……！ も、申し訳ありません！」

ゾランはがばりと頭を下げる。視界に、最上位神官の靴が目に入った。靴にも神の啓示が刺繍してある。その刺繍入りの白い靴に僅かに散った赤い色に血の気がひいた。

自分の血だ。血で最上位神官様の靴を汚してしまったのだ。

だが、ぶるぶると全身を震わせる少年の身体を、当の最上位神官が抱きしめて立たせる。

いい香りのする白いハンカチがゾランの鼻を優しく拭う。目の前の理知的な緑の瞳を、ゾランは夢を見るような目で見ていた。視線が合い、緑の目がゆるりと細められる。

「鼻血はもう止まっていますね。これなら治癒は必要ありません」

「は、はい！ はいっ……！ さ、最上位神官様、申し訳ありません……！ お、おく、お靴に俺の血が……」

最上位神官の横に控える上位神官が、他の神官から何かを受け取る。それは新しい靴だった。

「フェルナーダ様。代わりにの履物を」

だが差し出された靴を最上位神官は手を振って下げさせた。

「必要ありません。同じ神官の血が、汚れたものであるはずがない。その靴は下位神官達が心を込めて刺繍した物。次の祝福の日まで大

事に保管しておきなさい」

「仰せの通りに」

恭しく頭を下げた上位神官達を従え、最上位神官は何事も無かったように去ってゆく。

ゾランは感動に震えながら、その背を見送った。いつのまにか頬に熱いものが伝っていた。

なんて素晴らしいお方だ。

熱狂的な信望が心の中に湧いてくるのを感じ、ゾランは神殿の冷たい床に跪いた。そして最上位神官が歩いた床に口付ける。

神よ、どうかあの素晴らしいお方に、更なる栄光が降り注ぎますことを

ちらりと振り返ってその様子を眺めた上位神官は唇を皮肉に歪めた。そして隣を歩く最上位神官に小声で囁く。

「またお前の信者が増えたな」

「……何の事ですか、マヌエル。我々は既に皆、神の信徒です」

上品に微笑み返され、白けた気分になってマヌエル・コーザヌラカトは口を噤んだ。

彼は最上位神官アルヴァ・フェルナーダに一番親しいとされている側近だ。下位神官の頃同室で、奇跡の力で病気を治してもらったのが彼だ。

随分、変わってしまったものだ。

マヌエルは、荒んだ目をした6年前のアルヴァを思い出す。小さな背に艶のない髪をして、澱んだ暗い目をしていた。

マヌエルはどうしてもその底なし沼を思わせる目を好きになれなかった。

無口なくせに性格は攻撃的で、カツとなると手がつけられないような所があった。

裕福な商家の生まれであるマヌエルには、孤児のアルヴァの気持ちなど分らない。理解しようとする思わなかったので、付かず離れずの付き合いを保っていた。

それに年齢も大分離れていた。マヌエルは既に十九歳、アルヴァは十三歳だった。そしてその年齢以上にアルヴァは子供に見えた。

だが、ある日を境にアルヴァは変わった。

耳に怪我をしたと行って聖布を巻きつけたあの日以来、何かがいや何かではない。目が変わったのだ。

あの底なし沼のような澱んだ目が、何かを決意した男の目になった。温度がなかった目の奥に、全てを燃やし尽くすような情熱を感じた。明るく輝く光ではない。暗い闇に燃える炎だ。そしてそれはマヌエルの勘違いではなかった。

病気を得たマヌエルを奇跡の力で治癒したアルヴァは、実際全てを燃やし尽くすような勢いだった。自分を利用しようとする貴族や神官達と戦い、文字通り”燃やし尽くした”。

その苛烈さに、マヌエルは恐ろしさも感じたが、彼にどこまでも付いていった。自分の手も汚した。実家の商家の金まで使って前の最上位神官の弱みを握り、脅して退かせたのはマヌエルだ。

徐々に付き合いが深まって、既に大事な友人になっていた彼を一人にはしておけなかったのだ。

まあいいさ。俺だけは昔のお前を覚えておいてやる。

端正な横顔に優しい微笑を浮かべたアルヴァを見ながら、マヌエルは思った。

今はもうアルヴァは底なし沼のような目をしていない。そして、全てを燃やし尽くすような苛烈な目もしない。

だがそれらが無くなってしまった訳ではないことをマヌエルは知っていた。

アルヴァはまだあの闇の炎を持っている……。

それは、今ではある話題が上る時だけに顔を覗かせていた。聖女の話題の時だ。

聖痕が発覚した時、アルヴァはどれほどしつこく問われようと、何を代償に差し出されようと、自分に聖痕を授けた聖女が存在を誰にも話さなかった。公にしたのは最上位神官になり自分に敵対する貴族や神官を始末しきって、民衆をも完全に掌握した後だ。

時間が経ち、搜索は全く上手くいっていない。

どうも神殿に料理人として勤めていたらしいが、入れ替わりの激しい職場で記録も残っていない。

だがそんな事はアルヴァには予想がついていただろう。それでも、すぐに聖女を追わなかった。

誰かに奪われるのを恐れたのだ。

実際、すぐに聖女の事を明らかにすれば、聖女は教会が帝国に取り込まれ利用されていただろう。

だが、今は違う。

今なら確実にアルヴァのもとに留めておける。幼いアルヴァはそこ

まで計算して、決して口を割らなかつたのだ。聖痕の事もそれが聖痕だと気づかなかつたというのは嘘だろう。彼は全てを分かつた上で待っていたのだ、自分が成長するのを。

獣のように身を潜め、じつと時が熟すのを待っていた。

アルヴァが初めて聖女について語ってくれた時のことを、マヌエルは忘れられない。貴族たちを初めて処刑した夜、マヌエルに秘密を打ち明けるようにして熱っぽく囁いた。

あいつらは聖女様への最初の生贄だ。

そう言ったアルヴァは微笑んでいた。それは純粹な笑みだつた。

マヌエル。俺はあの聖女様にもう一度お会いする為なら、そして聖女様を汚い奴等に奪われないうえなら何だつてやる。俺が聖女様をお守りする。その為なら、何人だつて何百人だつて殺してやる

今なら分かる。

孤児として生まれ、理不尽な苛めや体罰にさらされてきたアルヴァの絶望はそれほど深かつたのだと。

初めて会つた聖女に魂の全てを奪い去られてしまふほどに、彼は絶望していたのだ。

マヌエルは誰にも気付かれないように溜息を吐いた。

聖女は一体今どこに……。

絵画に描かれたほどの美女ならばそのうち出てくるだろうと思つていたが、その足取りは全く掴めていない。

大聖堂のもつとも奥で神に祈りを捧げるアルヴァを見ながら、マヌ

エルはまだ見ぬ聖女へ思いを馳せた。

十二番目の王子・2

三つの大国に囲まれるカンテグラードは、中央の王宮から放射状に道路が整備された国だ。国自体とても小さく、端から端まで馬車なから一日で駆けることが出来るし、その”端から端まで”ずっと民家や店が続く。

中でも商神とまで言われる故ルビエル王の名が付けられたルビエル通りは、もっとも華やかで活気がある。王宮に近い所には貴族御用達の商店や大規模な商會が門を構え、離れるに従って大衆的な酒場や店舗がひしめき合う商売の道とも呼ばれる通りなのだ。

そしてそのルビエル通りに王宮の正門があるというところが、このカンテグラードという国を端的に表している。

この小国が農業を捨て、自国の騎士や兵士すらも捨てたのは随分昔の話だ。食料は輸入し、兵士は全員金で雇った傭兵、王家は王族を惜しまずに側室や愛妾、婿や養子に差し出すことで三大国と同盟を結んできた。そして、大陸で最大宗教のサリナル教を国教として毎年莫大な寄付を納めている。

周辺三大国にとってもこの小国の存在は便利だという様々な事情もあり、したたかなカンテグラードは今まで何度かの危機を乗り越えて生き残ってきた。

だからカンテグラードにとって、自分が生き残る最も大事な条件は周辺の三大国の力の拮抗だ。

それをよく理解しているカンテグラード人は、三大国の過去の戦争において常に暗躍してきた。武器を流し麻薬を流し疫病を流行らせる。時にはスパイめいた真似までして、三大国の均衡を操ってきた。三大国も馬鹿ではない。それを察してはいるものの、もはや大地に染みこむ水のように三大国に深く入り込んだカンテグラード人を排除することは出来ない。サリナル教の強い庇護もある。

そして厄介なことにカンテグラード人は金を紡いだような輝く髪と夕焼けの空のような黄昏色の瞳が特徴的な、美貌で有名な民族でもある。くだらないことではあるが、権力者がその美貌に目が眩んで後宮に召し上げ、入れあげているとなると話はややこしくなる。トルファナ帝国でも、実際前の皇帝の寵姫がカンテグラード人であった。

そのカンテグラードの中心地。

王宮のすぐ東には、サリナル教会の神殿が建てられている。

一番上の階にある神殿長の執務室で手紙を差し出された上位神官ジールは、苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

「また聖女に関する問い合わせが来たのか。先月も報告したばかりじゃないか」

そう、最上位神官が変わって以来、聖女の搜索は各地で続けられている。勿論カンテグラードでもジールが調べた。

聖地バスガルクから来た女、料理人の可能性、おおまかな時期。それらの条件に引っかかる女は一人いた。料理の修行のために聖地バスガルクからカンテグラードの王宮に移ったスーシャという女だ。だが調べると、スーシャはくすんだ鋼色の髪に特徴のない平凡な顔立ちの女だという。

教会の金でカンテグラードに来たが、料理の腕を見こまれて王宮にそのまま引き抜かれて居着いているようだ。金もきちんと返済されている。今は十二番目の王子の料理番という出世ぶりのようだ。

いや、十二番目というと母親は元高級娼婦の愛妾だな。後ろ盾がない王子だから、出世というのも微妙か？

だがともかく本人に問題はないし、聖女の絵とまるで違う容姿というので面談まではしなかった。

聖女がいるに当たってカンテグラードにはいない。これだけ探しても出てこないのだ。

忌々しそうに手紙を受け取ると、手紙を持ってきた中位神官が無言で頭を下げて退出する。

それを待って、ジーレは手紙を開いた。いつもと全く変わらぬ内容だ。

聖女の捜索を継続しろということ。

また、これもいつも通りだが、聖女に関する重大な情報をもたらした上位神官は、ただちに聖地バスガルクへと戻す旨が書いてある。つまり、出世を約束するというわけだ。

サリナル教では最上位神官は一名、上位神官は五十名と決まっている。その上位神官の中でも聖地に勤めることが出来るのは、半分の二十五名。彼らは最上位神官との会議に出席する最高幹部として扱われている。

「フン、馬鹿め」

ジーレは手紙を暖炉の火に放り込んだ。

誰も彼もが出世したいと思っっているわけじゃない。特に貴族出身のジーレは望んで神官になつたわけでもないのだ。出来のいい兄がいなければ帝国の屋敷で暮らしていたかった。当たり前のことだ。

やはり今の最上位神官は元孤児らしく、何も分かつちやいないらし

い。

聖地バスガルクに帰るなんて真つ平だ。つい最近の最上位神官の交代劇にまつわる血なまぐさい肅清にも肝を冷やした。心底カンテグロードにいて良かったと思う。

第一、あそこには劇場の新作も無ければ朝まで続く仮面舞踏会もない。猥雑なショーも酒の品評会すらないじゃないか！

「誰があんな辛気臭い所へ帰るものか」

それにジールには最もここを離れたくない理由があった。

飾り棚に置いてある、鍵付きの陶器のオルゴールを開く。そこには手のひらよりも小さな絵が入っている。金髪の女がこちらを振り向いて微笑んでいる肖像画だ。

「なあ、トルテリヌ。誰があんな所へ……」

それはジールがここカンテグロードと一緒に暮らしている女だ。

サリナル教では神官は結婚が禁止されている。女と寝るくらいなら黙認されるが、同居だ。この件が発覚すれば教会からの放逐くらいではすまないだろう。何しろジールは曲がりなりにも上位神官なのだ。見せしめに破門されることもあり得る。破門となれば、貴族の身分も取り上げられる。

ジールは生来、小さな男だ。行くあてもないというトルテリヌをこつそりと家に住まわせた後も、何度も女を殺す夢を見た。うなされて汗だくで目を覚ましたことは何度もあった。他の生き方を知らぬジールが貴族でも神官でも無くなれば、どうやって生きてけばいいのか。泥水をすすするような貧乏暮らしが待っている……。

だが、悩みに悩んだ末にジールは腹をくくった。自分にはトルテリヌだけは捨てられない。捨てるくらいなら殺す。そして殺せば身の破滅という点では同じ事だ。

確かにジールは貧乏を知らない。他の生き方を知らない。だが、知らぬことは知ればよいのだ。

小心ゆえにジールは前もって破門された後の生き方を探し始めた。そして幸いにもそれは見つかっている。今は時期を見て、トルテリ又の存在が漏れる前に、こっちから神官を辞めてやるつもりだ。

暖炉の火がパチンと跳ねる。

ジールはもう一度呟いた。

「誰があんな所へ帰るものか……」

さて、神殿の隣のカンテグラード王宮内の調理場では、今は午後の小休止の時間だった。料理人同士でお茶を入れてのんびりと語り合ったり、昼寝をしたりできる休憩時間だ。

くすんだ鋼色の髪を編んでまとめた女性　スーシャも、紅茶を前にくつろいでいた。

そこに軽い足音が近づいてくる。お仕着せのドレスを纏った侍女だ。

「スーシャ」

呼びかけられただけで、スーシャはこの休憩時間が終わったことを悟った。がっくりと肩を落とし、カップを戻すスーシャに、周囲の料理人達が「頑張れ！」と同情混じりの声援を送る。見れば、侍女も申し訳なさそうな顔で立っている。

「休憩中なのよね？ 分かってるんだけどフェルナン王子が、その

……」

「また痲癩起こしてるんですね」

「私達じゃ手が付けられなくて。フェルナン王子も今朝、夕刻前にスーシヤを呼ぶように仰ってたし、その、少々時間を前倒して…

…駄目かしら」

「……………」

スーシヤは溜息を飲み込んで立ち上がる。侍女に苦情を言っても仕方がない。

「私、行きますから。一緒じゃなくていいですよ」

「そう？ ごめんなさいね」

謝りつつも、侍女はホツとした顔だ。それもそうだろう、フェルナン王子の痲癩というのは手がつけられない。本や花瓶が飛び交う部屋は貴族出身の侍女には恐ろしいだろう。

料理人の仲間にひらりと手を上げてから、スーシヤは王子の部屋へと向かった。

スーシヤが行くと、部屋はもうシンと静まっていた。

軽くノックして「スーシヤ・ロザです」と名乗ってから扉をそっと開く。

床には割れた花瓶と、色とりどりの花弁が散らばっていたが、スーシヤは全く驚かなかった。むしろ今日は花瓶だけかと意外に思った。

フェルナン王子　カンテグラードの王族で、今の王の十二番目の息子。

カンテグラードで修行しているうちに、スーシャの作ったデザートが気に入ったという理由でフェルナンが自分専用の料理番へと取り立ててくれた。

だが、周囲はスーシャにとても同情的だった。

フェルナン王子とは、曰くつきの王子だったのだ。

それは彼の容姿に起因する。金髪に黄褐色の瞳が特徴のカンテグラード人なのに、フェルナンだけは金髪に黒の瞳だったのだ。

誰も彼もが母親である元高級娼婦の愛妾の不貞を疑った。他でもない王が自分の子であると認めしたが、それでも陰口は続く。黒はカンテグラードでは縁起のいい色ではない。死神の息子、不義の黒、不吉の目、色々と言われているらしい。そして、そのような陰口に人は慣れるという事はない。

結果、フェルナンは二十歳にもなるのに、通りすがりに嫌味を言われただの大臣が冷たいだのの理由で、部屋の調度品を破壊するような生活を送っているのだ。

だから侍女には怖がられている。

だが、スーシャはフェルナンを怖いと思ったことがなかった。それが伝わるのか、フェルナンはスーシャによく話しかけてくる。かしこまって返答していたら普通にしろと言われたので、スーシャも最低限の礼儀はわきまえた上で普通に接している。

これが他の王子ならば問題だが、何しろ相手は色々と問題のある王子だ。ことあるごとにスーシャを呼びつけるのを、侍女などに嫉妬されることもない。むしろありがたがられている始末だ。

「フェルナン様……？」

扉から手を離し、そつと室内に入る。その時、死角から出てきた手にグイッと腕を引かれた。

「ひっ……！」

ドン！とフェルナンの両手がスーシャの顔の横で鈍い音を立てる。壁に押し付けられ、両手で囲われたのだ。

フェルナンの顔が、スーシャの顔に寄せられる。息がかかるほどに近い。驚いて瞬きを繰り返すスーシャに構わず、フェルナンは低い声で唸るように喋りかけた。

「……先ほど、男爵に『あなたの父上の機嫌はどうです？ どちらにいらっしやるか知りませんが』と言われた」

何とも難しい話題だ。スーシャは黙ってフェルナンの顔を見つめた。黒い目が揺れている。傷ついているのだ。

「男爵だぞ。男爵ごときが、王子の俺にそんな口を叩くのだ」

「……無礼ですね」

「ああ」

そう言うものの、フェルナンは口元に情けないような自嘲の笑みを浮かべ　そして、それを振り払うようにして消した。

「お前も俺と関わるとろくな事にならないぞ。何しろ俺は　黒の死神だからな」

フェルナンはそう囁いて、片方の頬だけで冷たく笑った。

そんなフェルナンに、スーシャは思わず吹き出してしまった。

「ぶっ、アハハ！　フェルナン様、黒の死神って……！　アハハハ

！」

「なっ………！」

大口開けて笑うスーシャに、フェルナンは呆気に取られる。そのせいで反応が遅れて、スーシャにてきはきと上着を脱がされてしまう。

「お、お前……いきなり何だ！ 無礼だぞ！」

「はいはい、無礼ですみません。でも濡れてますよ。花瓶の水ですか？ 風邪をひきますから、さっさと着替えてください。まったくいい年して死神ごっこなんてする暇があったら、兄王子様がたの手伝いでもしたらどうです。忙しそうですよ、あの方達は」

「うるさい！ 俺の手伝いなんか、あっちが嫌がる！ 俺は嫌われ者だからな」

それはどうだろうな、とスーシャは思った。

フェルナンの黒い瞳は、確かにカンテグラードでは異質だ。陰口を叩く人達も多かっただろう。

だが……。

「……あれ？」

上着を簡単に畳んでいたスーシャは、上着から何かきらめくものが床に落ちたことに気づいた。

慌てて拾うと、それはネックレスだった。華奢な鎖に、小さな黒い宝石がついている。

「フェルナン様、申し訳ありません。これ落としてしまいました」

まだブツブツと文句を言っていたフェルナンは、差し出されたネックレスを見て、乱暴にそれを奪った。

「……まったく、だからお前は嫌なんだ……驚かせようと思ってたのに……」

「え？ 何です？」
「もういい、あっち向け！」
「は？」

訳が分からないまま、スーシヤはフェルナンに背を向ける。すると、目の前にブランと先ほどのネックレスが揺らされた。背後のフェルナンがスーシヤの目の前に吊るすようにして揺らしているのだ。

「……………このネックレス」
「はい？」
「どう思っ？」

改めてネックレスを見る。揺れている黒い宝石は、とても

「綺麗なんじゃないですか？ 黒くて、まるでフェルナン様の目の色みたいですね」
「そうか」
「はい」
「……………これ、お前にやる」
「えっ!？」

思わずスーシヤはフェルナンを振り向いてしまった。だが、頭を掴まれてグイッと前を向かされる。

「うるさい！ いつも旨いもの食わせてくれる礼だ！」
「うるさいって別に私何も言ってますん」
「口の減らない女だな！」

怒りながらも、フェルナンはネックレスの説明をした。

「カンテグラードでは二十歳になると祝いで、黄昏色の宝石を相手に贈るとというのが通常なんだ！ 普通は伴侶や親が贈るんだがお前にはいないようだし、二十二なのにネックレスひとつしてないし…だから、俺が用意してやったんだ」

フェルナンが自分の年齢を覚えていたのが意外で、スーシャは驚きに目を丸くした。確かに会話の中で年齢を伝えたこともあったが、覚えてくれていたのか。王子が使用人の年齢などを。

「黄昏色じゃなく、俺の不吉な目の色で悪いがな」

「いいえ。私は黒が好きです」

何しろ、昔は自分だって黒かった。髪だって黒だったのだ。

「……そうか。だったらいいんだ」

スーシャの首に、フェルナンの手が回されてネックレスがかけられる。ひやりと冷たい感触に目を閉じる。

フェルナンの手が、首の後ろで動くのを感じた。肌に触れないように細心の注意を払っているのが分かった。

口調も乱暴で、さっきは頭を掴んだりしたくせに、と思うとおかしくなってくる。

そしてスーシャの前に回ったフェルナンが、確認するようにスーシヤを上から下まで流しみた。

「……よし。では……」

こほん、と咳払いをして、フェルナンの指先が宝石に触れる。そして目を瞑り、祈るようになんて言った。

「お前の忠誠に感謝し、フェルナン・セツ・マズク・カンテグ
ラードがスーシャ・ロザに心を込めて贈る」

そして、そつと目を開けてスーシャを見つめて微笑んだ。

「願わくばお前の人生に幸福の花が多く咲くことを」

その優しい眼差しに、さすがにスーシャの胸がドクリと打った。美貌で有名なカンテグラード人の王族だけはある。光を集めたような髪に、甘い黄昏色ではなくとも、黒い瞳はまた一種独特の艶のある魅力があつた。

しかしこういうところ、やっぱり王子様なんだなあ。

フェルナンは我が儘で癩癩持ちで、誰かに嫌味を言われたくらいで壁に花瓶を投げつける。それでもその花瓶が使用人に投げつけられることは決してないし、誰かに素直に感謝をすることも知っている。誰かの幸福を、心から願うこともできる。

色々あるだろうが、フェルナンは周囲にちゃんと愛されて健やかに育った人間ではないだろうか。そうでなければ、こんな性格でいられる訳がない。実際、妹のカイエルナ姫などはフェルナンにとても懐いて仲が良いと聞くと、正妃もフェルナンをお茶会によく呼んでいるという噂だ。

兄王子達に嫌われてるなんて、きつとフェルナン様の思い込みなんじゃないかな……。

花瓶のかけらを注意深く拾いながら、スーシャはふてくされたようにして椅子に座る癩癩王子を微笑ましく思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3905z/>

日没の都

2011年12月16日23時55分発行